—特集　追悼・三上一夫—

三上一夫先生遺稿

[一] 榎本武揚の「蝦夷地共和国」論

一　課　題

榎本武揚は、もともと民主的な蘭学をはじめ幅広い学識をもち、オランダ留学後、政府軍の江戸入城にあたり、海軍副総裁であったかれは、軍艦引き渡しを拒否し、旧幕府海軍を率いて北上、箱館五稜郭に拠って、「蝦夷地共和国」の実現を懸命に目指したのである。この点、どのような企図が秘められていたかを検討することにする。

二　「蝦夷地共和国」論

榎本が箱館五稜郭に拠って、日本近代化路線のうえで「蝦夷地共和国」論を提起したことは、まさしく蝦夷地〈北海道〉に民主的な「共和国」政府の樹立を目指すわけで、榎本の真の悲願とするところをみてとることができる。

ただし「共和国」政府の具体的内容までは論ぜられないが、この点、いずれ榎本としては、さらに具体的な方途を提示する段階に至るとも考えられる。

三　「蝦夷地共和国」論の挫折

薩摩出身の黒田清隆は、幕末の薩英戦争に参加、のち薩長連合に尽力、戊辰戦争では、五稜郭の戦いで、榎本軍に強引に降服をせまり、榎本もついに黒田の要請を受諾せざるを得なくなる。従ってこの時点で、榎本の掲げた「蝦夷地共和国」論は、すっかり挫折するわけである。

四　日本近代化路線の「二つの道」

高橋幸八郎編『日本近代化の研究（上）』（東京大学出版会、

一九七二年）の序文で、高橋教授は、「近代化」路線の「二つの道」つまり農民大衆の不断の反封建闘争によって、封建制の全面的廃棄を「下からden bas」果たす「フランス型の道」〈革命的な道〉と、「上からvon oben」の改革による「プロシヤ型の道」〈「妥協」の保守的な道〉を設定、日本の場合は、明確に後者の「プロシヤ型の道」をたどらざるを得ないと論ずるが、「明治維新」の基本的な歴史的性格を把握するうえで、きわめて重要な研究視角と思考される。

たしかに榎本武揚が目指した「蝦夷地共和国」も、近代化路線のうえでは、「プロシヤ型の道」〈「妥協」の保守的な道〉に該当すると判定せざるを得ないわけである。

おわりに

榎本武揚が、政府軍の江戸入城にあたり、海軍副総裁であったかれは、軍艦引き渡しを拒絶し、旧幕府海軍を率いて北上、北海道の函館五稜郭に拠って、「蝦夷地共和国」論を提起したことは、まさしく北海道に民主的な「共和国」政府の樹立を目指すわけで、大いに着目したいところだが、この点、黒田清隆の介入をまつまでもなく、「近代化」路線の帰趨から判断して、榎本の説く「蝦夷地共和国」論自体は結局成り立たないとみなければならない。

（平成二十五年一月二十七日受理）